

令和6年度 第3回公立鳥取環境大学教育研究審議会 議事要旨

- 日 時 令和7年1月24日（金） 10:00～11:10
- 場 所 本部講義棟3階 大会議室（対面会議）
- 出席者 小林朋道委員、宇佐美誠委員、石井実委員、山口武視委員、植田紀子委員、河井登志夫委員、中山実郎委員、根本昌彦委員、張漢賢委員、吉田高文委員、今井正和委員
[11名/12名]
- 欠席者 足羽英樹委員

【議事】

1 前回議事要旨の確認

原案のとおり承認された。

2 協議事項

(1) 令和7年度当初予算の編成について（案）

事務局から令和7年度当初予算の編成について（案）について説明があり、意見をいただいた。これらの意見を踏まえて、令和7年度当初予算の編成について（案）を修正することとなった。

〈主な意見等〉

- ・ 収入予算の運営費交付金に標準分と特別分があり、特別分に施設が含まれるという事で、補助金収入の施設整備費補助金は設置者からという事だが、これは恒久的な性格なのか。運営費交付金の臨時的経費との関係はどうなっているのか。

重点取組事項のなかで、「安定的な志願者の確保」の中に学部の事は記載されているが、大学院の定員確保は、含まれているのか。大学院の定員確保のためどのような事を行っているのか。→運営費交付金の特別分の臨時的経費は、資産購入に対する臨時的経費で実験機器等の購入、サーバーシステム等の費用にあてている。施設整備費補助金は、空調機器の改修工事、太陽光パネルの設置等の脱炭素の関係の費用にあて、施設整備補助金と脱炭素補助金で整理している。

大学院の充足は、開学以来、充足したことがない。定員確保対策として、企業・官公庁に勤めている社会人を対象に宣伝も兼ねて公開講座を行っている。実績は、少ない。近年、学部からの内部進学者を増やそうと力を入れている。今年度から県外出身であっても内部進学 of 学生は県内出身者と同様の扱いとなるよう月々の学修支援という形で支援して、進学者を増やすようにしている。現在の1年生は、多くがその恩恵を受けていて、アルバイト等に頼らなくても就学できる環境となっている。直ぐに効果が出ているわけではないが、そういうことを広く宣伝して入学者確保に努めていく。

大学院に対する予算は、明確な事業費を意識していないのが実情。どこの大学院でも苦労している。今後は学部教育をしっかりするという事が、大学院へも大きく関係してくる。

- ・ 確かに全国的に大学院の充足率は課題になっている。基本的なスタンスとしては、学部の学生に研究の面白さとかを効率的に伝えて、もう少し学びたいのなら大学院に進学する。企業等が大学院修了生を採用すると初任給が上がるから敬遠するという時代は過ぎていて、修士修了生はウエルカムの時代になっている。前職の大学では、改組をする時、文科省に申請すると現行の大学院の充足率の悪さを追求された。改組の障害になってしまうので、やはり一定の学生は確保しておかないといけない。内部進学が基本だが、社会人や留学生の3方向でやって行か

ないといけない。

→DX の要請の中で社会人リカレントのニーズは認識している。ただ未だ対応する戦略が練れていない。

- ・ 留学生は、インターネットからの情報に頼っている。自分のところの大学では、留学生を確保するため、広報用ビデオを作っている。大学が大きなサイズなのでキャンパス別や研究科別に分かれて作っている。私の居るところでは、留学生が多いという事情もあるので特に積極的に取り組んでいる。私の居る研究室には院生だけで 20 数人いて、ここでも一つ作った。実際に作ってみるとかなりアクセスがある。留学生の確保のための方向性としては、広報用ビデオは良いと思う。

制作は業者に委託、コンテンツは教員と相談し、留学生や社会人学生の声を盛り込む。業者は慣れているので、かなり立派なものが出る。今後の参考にしていきたい。

重点取組事項に学生の就学上の悩みに対応とあるが、どこの大学でもますます重要になっている。昔の学生と比べて資質が変わり、相談件数が増加している。現在の学生のサポート体制はどうなっているのか。

→今掲載されている費用は、ヤング・ケアラーの外部相談窓口の委託経費が半分程度占めている。本学では、臨床心理士を常勤で雇用して、「こころの相談室」で勤務している。またその隣に「保健室」があり、そちらにも看護師が勤務している。学生の学修支援センターでのサポートは、心理面のサポートを臨床心理士が対応し、学務課の学生担当の職員 2 名が合理的配慮の対応している。

ピア・サポーターの学生を集めて、いわゆるサードプレイスというか、自由に話が出る、くつろげるような場所を作っているが、なかなか浸透していない。学業で困っている事とか大学生活での悩みとかを気軽に話せるような場にしたいと思っている。

- ・ グローバルな視点の中の海外の大学との学生交流というのがあるが、いま日本の大学にはかなりの留学生がいる。英語を母国語としなくても十分に母国語に準じるような英語力を持った留学生が沢山いる。自分のところの大学では、高校生の大学案内を留学生にさせている。日本人の高校生はシャイであまり話さないのかと聞いてみると、外国人と話せるのが面白らしく、積極的に英語でやり取りして留学生も楽しんでいる。国内の他大学の留学生との交流も検討してみてもどうか。

→留学に関して、海外交流を広げるとなると事務や費用の負担も大きく、そういうやり方もあるのかと、考えさせられた。いかに留学生の多い大学と交流していくかというパイプ作りの面も含めて検討していきたい。学生も海外に行くには、多額の費用が掛かるので、学生本位で検討していきたい。また、本学では、「英語村」というのを設置していて、鳥取大学の留学生もアルバイトで参画し、空いた時間に学生が来て気軽に話せる場所を提供している。

地方の小規模校で留学生をどう見るか、考え方、捉え方については、色々な意味で大学にとって重要な存在だと思っている。私費留学生もかなり良い学生が入ってくれていて、他の学生に対してもいい影響を与えてくれるし、先ほどのお話のあった大学案内など、もっと活躍してもらい他の学生がそれに影響を受ける、そういう方向もしっかりと持っていきたい。

- ・ 重点取組事項は、前年対比、従来との比較、新規事業か充実させたのか等、対比が無いと解り難い。学生や対外的に PR する、環境大学としての独自性を出すのであれば、「こういうものが環境大ならではの物、新しい取り組み」というのをもっとわかりやすく提示していただいた方が良い。判断基準が無く何とも言えない。

→次回もう少し詳しい内容で提出したい。

- ・ 環境大学という「環境」という冠が付いた大学なので他大学とは違う SDGs の取り組み等もっと強烈的な PR をされてはどうかと思う。環境大学だからこそという受験生に対する PR が控え

めな感じがする。

→現在、公立大学が101校と増えてきている。国立大学は、従来からの重みがあるが、公立大学は私立大学との関係があり、環境的には厳しいところがある。やはり独自性というか「ここは、こうなんだ」というのが難しいが、本学については、開学から「鳥取環境大学」という路線を出しているのがある意味非常に強みになる。独自性を強調していくというのは、戦略として非常に意識しているし、予算面でもしっかり出るように考えていきたい。

- ・ 県内就職率の向上について「地域で活躍する人材の育成及び定着を推進する」とは、具体的にどのような考えを持っているのか。「大学の脱炭素化」のなかで、具体的にどのような事を計画しているのか。また環境大学として特徴的な計画が有るのか。

→県内就職率の向上については、低学年から「鳥取の良さ」を知ってもらおうという取り組みを行っている。鳥取県、鳥取市から補助金で、学生が地域の方とともに活動したり、地元の企業を知ってもらうツアーを企画したりする事業を実施している。3年生4年生になってから鳥取を知ってもらうという事では、既に遅いため、低学年から学生に地域を意識してもらい、「鳥取は良いところだ」、「こういう繋がりが出来た」「こういう会社がある」という事を知ってもらう事によって、最終的には県内就職率の向上につなげていきたい。

組織的な継続した取り組みをずっとやっているが、学生が地元に戻る、やりたいことが鳥取に無い等、大学だけでは何ともならない部分がある。県の方でもいろいろと力を入れているが、大学としては、学生も魅力があってやりたい仕事だと感じ、企業や地域にとっても学生が意欲を持って働いてくれてwinwinとなるよう考える。

特に本学の場合は、鳥取県を目指して来てくれている学生が進学している。そういう学生が求めている職種について、企業の事業内容を変えるのは難しいが、鳥取独自の要素を本業の中に取り入れたり、少し手を伸ばしてみたり、学生の意見を聞いて新しい分野についても模索していくことも必要ではないかと思う。鳥取の伸びる要素はそういう学生の新しい仕事の内容が伸びていく可能性があるのではないか。県内の企業をしっかりと知ってもらうことと新しい取り組みも必要ではないか。

脱炭素に関しては、大学の取り組み、独自性を出すうえで大事なことだ。自然資源、生物多様性を経済とどのように結び付けるか。そこに生まれる新しい仕事、という観点も必要ではないか。脱炭素については重要な事で、DX、GXと非常に深く関わっていることで、これからは生きる学生にとってDXは重要な事だ。学生自体もだんだんそういう事に興味を持ってきてくれている。例えば自発的にSustainability Weekを作って、学生自身が計画して1回目は知事にも出席していただき開催した。脱炭素に焦点を絞った動きもある。学生の成長にも繋げていきたい。

大学の脱炭素の事業については、省エネと創エネという事で、省エネの部分は空調設備の改修、熱源の改修、照明器具のLED化に取り組んでいる。創エネの部分としては太陽光パネルの設置等に取り組んでいる。

3 報告事項

(1) 近況報告

事務局から近況報告があった。

4 その他

5 閉会